アーキビストの眼

慶應義塾史資料集第１巻『塾員塾生資料集成』を刊行して

慶應義塾福澤研究センター　西澤　直子

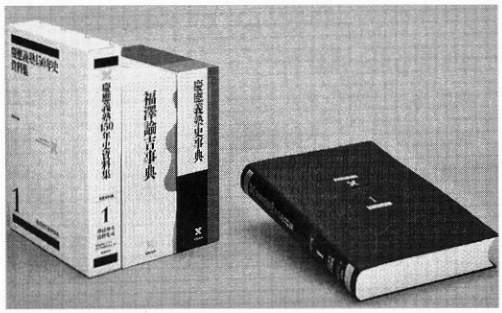
はじめに

慶應義塾は、2008年に創立150年を迎えた。それに先立ち福澤研究センターでは、1996年から記念刊行物として何を出版するかについて、話し合いを進めて来た。『慶應義塾百年史』全６巻を刊行してから50年が過ぎ、当然『百五十年史』をという声もあがったが、しかし大部な『慶應義塾百年史』と同じ密度でその後の50年を描くには、典拠とする資料の収集および整理が不十分であった。その理由として、ひとつには慶應義塾という組織がどんどん拡大し、全体を把握することが困難になっていったことがあげられる。一方で1960年代から90年代までは、まだ教職員ともに大学アーカイブスに関する認識が低く、現用文書をいかに保存していくかという意識がうすかったことが挙げられる。そこで記念出版物は、将来の『二百年史』執筆を見据えて、基礎的な資料やデータの収集整理を目的に、『慶應義塾150年史資料集』を刊行するという結論に達した。

１　刊行計画

まず別巻として創立イベントの年である2008年に、慶應義塾史を俯瞰することができる『慶應義塾史事典』、福澤生誕175年の2010年に高校生から研究者までの利用を目指した『福澤諭吉事典』という２つの事典を刊行した。そのうえで、基礎資料編から始まる本編の刊行を企画し、2012年10月に、本編第１巻『塾員塾生資料集成』を刊行した。

『塾員塾生資料集成』は、入学時の記録である「慶應義塾入社帳」（文久３年～明治34年）と、成績表にあたる「慶應義塾学業勤惰表」（明治４年～31年）卒業生名簿の「慶應義塾塾員姓名録」（明治23年～）という３つの資料を利用して、個人別に名前、出身地、身分、保護者、在籍の課程、卒業後の職業、原籍などのデータを掲げたものである。「慶應義塾入社帳」記載者はのべ15,401名に至り、「慶應義塾勤惰表」のデータ数は１人１学期分のデータを１件として66,405件、「慶應義塾塾員姓名録」は１人１年分のデータを１件として明治44年発行分までで30,007件になった。



慶応義塾史資料集

そのうち今回は、安政５（1858）年に福澤が築地鉄砲洲にあった中津藩中屋敷内で蘭学を教え始めてから25年間分、すなわち明治16年末までに入学した人物を対象とした。対象となった人物は実数で、4,940人になる。

２　資料概要

元となった資料の概要は以下の通りである。

１）慶應義塾入社帳

文久２（1862）年幕府の遣欧使節団の一員としてヨーロッパを訪問した福澤は、進んだ文明を目の当たりにして、漢学ではなく洋学による人材育成こそが富国強兵のための急務

であると考えた。帰国後、自らが預かっていた蘭学塾を、近代的な学塾に整えるべく尽力し、その一環として創設されたのが「入社帳」と略称される入門帳である。福澤は慶應義塾をともに学ぶ仲間＝会社・社中と呼び、社中に入るの意味で入社帳と呼ばれる。

もっとも古いものは無地の美濃判を袋綴した和装本で、文久３（1863）年春から記入がはじまり、表紙題箋に「性〔ママ〕名録」とある。年月日、次いで藩名あるいは主人名、姓名が記され、年月日の下には「入門」「入塾」の表現が使われている。無地紙に書かれているため、無罫紙本と呼ばれる。この綴への記載は、慶応４（1868）年４月１日を以て終了し、表紙に「姓名録第一」とある綴に引き継がれた。慶応４年４月は、それまで特定の名称がなかった塾を「慶應義塾」と定めたときで、無罫紙本にはまだ白紙部分が残っていたが、入社帳も一新したということであろう。

「姓名録第一」からは書式が定められ、印刷された罫紙に記入されている。巻頭に「定」として、「慶應義塾会社」に入る際に支払う金額や「入塾之証人」の身元引受に関する記載がある。項目名には「社中ニ入タル月日」と書かれていて、先述の「入社」の表現が定着したといえる。第２号からは題箋の文字が「入社姓名録」となり、途中題箋が欠損したものがあるが、第10号からは確実に「入社帳」と表記されている。入社帳は、明治34（1901）年11月（日付記載なし）の入学生を記録した第29号まで続き、書式は４種類が使われている。入社帳がなくなったのち、入学時の記録は「学籍簿」に引き継がれた。

また上記無罫紙本および第１から29号に加えて、「新　入社姓名録第一」「新　入社姓名録第二」「再入社帳」の３冊が存在する。「新入社姓名録」は、明治８年８月の書式変更に伴い、新書式が入学以外にも進級や卒業などに関して随時記録することになったので、新たに入学する者の記録（第８号）以外に、①旧書式時代に入学しまだ在学中の者、②休退学者で再入学する者について、新たな書式に

377――――岩崎　虎太郎

a．土佐国高知県　b．土佐郡高知町内帝屋町　c．士族　f．岩崎長武・長男　g．慶応2年12月　i．山内正直（士族）　j．府下牛込区牛込南町　k．明治14年4月8日　l．次丁表に記載あり　m．Ⅱ373

n．

年・月	等級
141～4	予備科／第一番、文章科規
145～7	予備科／第一番、漢学科／乙組
149～12	予科／第一番

378――――岩崎　直国

n．

年・月	等級
145～7	英外／丙組

380――――岩崎（改姓：福沢）　桃介

a．埼玉県　b．入間郡川越本町　c．平民　f．岩崎紀一・次男　h．14年5ヶ月　i．真野親我　j．東京芝虎門前　k．明治15年10月5日　m．Ⅱ520

n．

年・月	等級
159～12	予科／番外／二、漢学科／甲組／二　登録
161～4	予科／番外／一、漢学大試業／乙組
165～7	予科／四番／二、漢書大試験／乙組
169～12	予科／四番／一
171～4	予科／三番、予科／四番之一
175～7	予科／二番
179～12	予科／一番
183～7	本科／四等
189～12	正科本科／四等　登録
191～4	正科本科／二等
195～7	本科／二等
199～12	本科／一等

o．

年	職業
明治34	丸三商店員
明治35	北海道炭礦鉄道株式会社幹事
明治38～39	北海道炭礦鉄道会社員
明治40～43	会社員
明治44～大正1	日本瓦斯株式会社 其他諸会社重役

内容見本

合わせて記録する帳簿が必要になったため、創設された。なお、「再入社帳」は明治18年の１月から３月までの３か月間、わずか７名の記録である。

上記以外に、慶應義塾が抱えていた大阪慶應義塾、徳島慶應義塾、医学所、法律学校、大学部、幼稚舎の各学校に入社帳がある。

大阪（のち徳島）慶應義塾は関西地方の学生に向け、明治６年11月に開校した。しかし思うように学生が集まらず、８年６月には閉校となり、招聘のあった徳島へ移転した。教師、学生ともに大阪から移った者が多かった。しかし徳島慶應義塾も９年11月には閉鎖となった。大阪・徳島慶應義塾の入社帳は３冊からなり、題箋に「入社録」と書かれた２冊は、「原書〔之巻〕」「訳書之巻」で、残り１冊の題箋はほとんど欠損しているが、「徳島」とだけ読める。移転後すぐに使用され始めたわけではなく、９年３月までは「入社録」２冊が使われており、４月になって「徳島」に記載されるようになった。

医学所入社帳は、直接記入したのではなく、必要事項を記入した書類を提出させ、そこから転記したと思われる。和装本で題箋はなく、正式な名称は不明だが、明治６年10月から12年11月までの記録である。法律学校入社帳は、見返しに「法律学校入社帳」と書かれた洋装本で、夜間法律学校の入社帳にあたるが、冒頭部分が三田演説会の入会名簿として使用されている。大学部入社帳は、表紙に「第一号　入社帳　大学部」とある和装本

で、最初の部分で明治23年と24年の入学者が混在していることから、大学部発足の明治23年１月ではなく、24年春以降に作成されたと考えられる。幼稚舎入社帳は、明治13年に幼稚舎の名称が使われるようになる前の、７年１月６日の入学者から始まる。表紙には「第一号　入社名簿」と書かれている。慶應義塾や大学部の入社帳がなくなった後も、幼稚舎の入社帳は存続し、第６号からは「入舎名簿」と記されている。最後は、昭和22（1947）年４月入学者までが記載された第15号である。幼稚舎は初等教育機関で、現在でも慶應義塾幼稚舎は小学校課程である。

いずれの入社帳も時折、改姓届や住所変更届、保証人の変更届などが挿入されている。また入社帳に関連する資料としては、別置保管されていた入社承諾書や入社保証書がある。各藩や県が提出した慶應義塾への入社の許可証や、学生が規則である『慶應義塾社中之約束』を守らなかったときに、提出者が責任を取ることを明記した書類である。入社帳原本やこれらの資料は、『マイクロフィルム版福澤関係文書』（雄松堂フィルム出版　1989～1998年）に収録され公開されている。また影印本の『慶應義塾入社帳　復刻版』（慶應義塾　1986年）でも原本を確認することができる。

２）慶應義塾学業勤惰表

明治４（1871）年４月に福澤は、芝新銭座（現東京都港区浜松町）にあった塾を、学生数が増えて手狭になったことや自身の大病後の環境改善を求めて、現在もキャンパスがある三田（現東京都港区三田）へ移転した。これを機に、学則類や生活上の諸規則などを定めた『慶應義塾社中之約束』（以下社中之約束、　慶應義塾福澤研究センター資料（９）として『慶應義塾社中之約束』影印版がある。解説米山光儀）が編纂され、刊行された。さらに４月から、学生の成績表にあたる「慶應義塾勤惰表」（以下勤惰表）が作成・印刷されるようになった。

勤惰表は、等級別に成績順に全学生の名前を掲載し、学生たちに１冊ずつ配布したもので、当初は毎月発行され、明治６年３月からは学期別になっている。明治４年９月、５年３月および８月は、正確には「大試業席順」表で、明治４年４月編纂の社中之約束（「教授ノ規則」）で定められた「春秋ノ試業」の結果になる。もともと存在しないのか未発見なのか、現在のところはわからない月や学期（明治５年７月、12月、９年８月から12月期）がある。また明治13年５月から７月期および９月から12月期は、大きく欠損したものしか残っていない。全学生に配布されたものであるから、今後発見される可能性もある。勤惰表の発行は、明治31年１～４月期までで、以降は「成績表」という名称で34年４月まで発行され、その後は成績の一覧は作成されなかったようである。

ほかに、『学生勤惰表　慶應義塾大学部』および『慶應義塾幼年局学業勤惰表』が残っている。前者は明治23年に設けられた慶應義塾大学部（理財科、法学科、文学科）の同年12月から、32年12月までの試験成績表で、現存しているものは大学部の学務主任も務めていた教員門野幾之進が所蔵していたものである。『慶應義塾幼年局学業勤惰表』は、明治10年１月から４月期、５月から７月期、明治11年の１月から４月期、９月から12月期の４種類が現存する。同時期の『慶應義塾学業勤惰表』には童子科の成績が掲載されていて、人名は重ならない。『慶應義塾幼年局学業勤惰表』は福澤門下生の和田義郎が教えていた年少者の勤惰表と思われる。

３）慶應義塾塾員姓名録

慶應義塾で卒業の制度が定められたのは、明治６（1873）年のことである。３月改正の社中之約束において、「此学校ニテ本等ノ業ヲ全ク終リタル者ヘハ成業ノ免状ヲ与フベシ」「事ナクシテ退学スル者ヘハ其等級ニ従テ卒業ノ証書ヲ与フベシ」と定められた。すなわち「本等ノ業」（「予備等」に対して「本等」）を全て終えると、成業の免状を得、各等級で終える者はそれぞれの等級の「卒業ノ

証書」が与えられることになった。ただ現在慶應義塾に残っている「卒業」生の名簿では、明治７年４月「変則」科（「正則」に対し「変則」、17歳のち15歳以上を対象とした「読方ト訳」を学ぶコース）の「卒業」７名が最初であり、次いで同年７月に「変則」の「卒業」15名、12月に「正則」の「卒業」７名の名前がある。ここでの「卒業」は、それぞれ「変則」「正則」の「成業」を意味すると考えられよう。また同名簿には冒頭に、明治６年以前に在籍した者の中で「凡四ヶ年間在学シ当時後進ノ生徒ヲ誘掖シタルヲ以テ卒業生ト見做スベキ者」として158名の名前が挙がっている。

明治22年になると、慶應義塾の組織と運営方法が「慶應義塾規約」において定められた。その際、卒業生と、特に慶應義塾に貢献のあった者が選ばれて「塾員」となり、塾員の代表によって構成される評議員会が慶應義塾の最高議決機関となった。塾員のうち、「卒業」によってではなく慶應義塾への貢献によって選ばれた者は「特選塾員」と呼ばれる。その特選塾員も含めた全塾員の名簿が、「慶應義塾塾員姓名録」（以下塾員名簿）である。

最初の名簿の刊行は、明治22年10月調査の『慶應義塾　特撰員卒業生現在生　姓名録』で、明治７年以降の卒業生458名および特選塾員233名が掲載されている。しかし住所や職業に関する詳しい記載はなく、塾員名簿の原型が整ったのは明治23年発行分からである。基本的な形は、昭和23年まではいろは順、それ以降は50音順に塾員が配列され、各人の住所、職業、原籍、卒業年（特選塾員の場合は選出された年）が記載されている。但し、職業欄・原籍欄は明治29年発行分から、卒業年欄は明治42年発行分から設けられている。他に附録として、県別の塾員一覧、改姓名者・死亡者の一覧、印刷中に異動があった者の一覧などが収められており、附録は年によって多少相違がある。特定の戦争での戦没者一覧が加わっている年もある。

昭和28年以降は４年ごとに発行されたが、平成15（2003）年の個人情報の保護に関する法律の施行に伴い、平成13年が最後で、以降は刊行されていない。明治44年発行分までは、前掲『マイクロフィルム版福澤関係文書』に収められているが、それ以降の分は現在非公開である。

3　資料集第１巻の特徴

これらの資料はすでに公開されてはいるものではあるが、これまでは１人の人物について、入学時、在学時、卒業後のすべての情報を得ようとすると大変な作業が待っていた。入社帳は癖のあるくずし字も多く、最も基礎となるデータでありながら、何通りかの読み様が考えられる人物も出てくる。勤惰表は、在籍するすべての学生が成績のよい順に印刷されているので、名前を探す術がなく、端からあたっていくしかない。ある学期分を見つけると、次はその前後のことが多いが、在籍するコースそのものを変える場合もあれば、一時的に中断する場合もある。また塾員名簿はイロハ順ではあるが、たとえば梅田は「ウ」のことも「ム」のこともある。そして勤惰表も塾員名簿も、非常に誤植が多い。「次郎」の「次」の字が異なるくらいは何とか推測できるが、「三郎」や「四郎」になっていると兄弟の可能性も出てくる。見た目から「土方雄志」が「立方確志」と印刷されていたりもする。

今回は各資料のデータをエクセルに入力し、PCで名寄せ作業を行った。その結果３つの資料のデータを一覧できるようになり、人物情報を得るにはかなり便利になったと思う。しかしながら、家督の関係などで今より頻繁に改姓も行われ、上記のような理由もあって同一人物の判定作業は複雑で、同一人物でありながらも別人となっているような場合も多々あろうかと思う。

おわりに

初期慶應義塾には地方名望家の入学者も多く、地方史を研究される方には便利かと考え

る。しかし今回１人１人について、他の資料で検証することはせず、あくまでも３資料のデータによったため、ミスも多いと思う。ぜひ多くの方々に使っていただき、より正確でより便利なものに改訂できればと願っている。

＊入手をご希望の場合は福澤研究センターまでご連絡をいただければ幸いである。

fmc@info.keio.ac.jp
ＴＥＬ 03－5427－1604
ＦＡＸ 03－5427－1605